【武蔵野　創業50周年　感謝の集い】

日本経済新聞（12月8日付　埼玉・首都圏経済面）・日本食糧新聞（12月13日付）において
12月7日の武蔵野 創業50周年感謝の集いに関する記事が掲載されました。
安田会長、安田社長のご挨拶概要と共にご来賓のセブン-イレブン・ジャパン古屋社長およびセブン＆アイ・ホールディングス鈴木名誉顧問からのご挨拶も一部紹介されています。
衆議院議員　石破茂先生にも記念講演をしていただき多くのご来賓をお迎えして社内参加者を含め
300名以上の盛大な会となりました。

明治記念館で創業50周年行事

武蔵野

セブン-イレブン・ジャパン向けに弁当や総菜を供給する武蔵野（埼玉県朝霞市）は7日、明治記念館（東京・港）で「創業50周年感謝の集い」を開いた。セブン&アイ・ホールディングスの鈴木敏文名誉顧問やセブン-イレブン・ジャパンの古屋一樹社長ら来賓220人と、武蔵野グループの社員80人が参加した。

武蔵野ホールディングスの安田定明会長は「食と癒やしを人間に欠かせないものとして捉えている。2つを車の両輪として会社を発展させていきたい。今日から創業100周年をめざして歩み始める」とあいさつした。自民党の石破茂元幹事長による記念講演会も開いた。

同グループはセブン&アイ・ホールディングスのプライベートブランド（PB）の食パン「セブンゴールド　金の食パン」を開発。コンビニ向けおにぎりの定番具材「ツナマヨ」を生み出したことでも知られている。

武蔵野50周年「弁当」商品化が起点

「至誠」で100年企業目指す

武蔵野は7日、東京都港区の明治記念館で「武蔵野創業50周年感謝の集い」を開催し、50年の感謝とともに100年企業を目指して「至誠」を持ってまい進することを宣言した。

記念講演として石破茂衆議院議員が「時局講演」を行い、「人口が減るということは静かな国家の有事である。解決は地方創生しかない」と持論を展開し、日本のコメ消費拡大、健康な食卓の維持を目的に安田定明会長が日本べんとう振興協会会長時代に、同協会を社団法人化したいきさつにも触れた。

祝宴では冒頭、安田定明武蔵野ホールディングス会長が1970年に山崎製パン杉並工場からいなりを受注して炊飯事業に参入、弁当を提案したことが企業の弾みになったと述べ、「当時、小売で販売する弁当はなかった。紆余（うよ）曲折を経て、ここから『弁当』という商品が全国に広がったと自負している」と50年を振り返った。「武蔵野のバトンは新社長に継ぐ。武蔵野の繁栄に完成は無い。社員の知恵と工夫がある限り繁栄し続けるの言葉と『至誠』の志を持って堂々と未来に進んで行ってほしい」と社員へのメッセージを武蔵野の今後の進む道として披露した。

続いて、安田信行社長は「受注生産の厳しさとパートナーさんの協力が必要不可欠であることをわが身で感じてきた」と、理屈では計画を必ず実行する、出店はドミナント、資本は絶対に入れないという約束を今日まで守り、ベンダーはセブンイレブンだけに納入することを目的に日本デリカフーズ協同組合（会員社77社）を組織して技術共有して商品作りをしている。

「最初に約束したことを今日まで守っていただいていることがセブンイレブン創業時の取引先探しについて取引を切るとけん制され、大企業からは相手にされずと軌道に乗せるまでには苦労した」と述べてあいさつした。

会場は、伊藤順朗セブン&アイ・HD常務の乾杯の発声で、参加した約230人は和やかな懇親となった。

（福島厚子）

安田定明会長

安田信行社長

鈴木敏文セブン＆アイ・HD名誉顧問

なく事業の本質を体感してきたことを述べ、「工場、設備、技術、人材を受け継ぎ、今以上に個の成長を促して全員経営でおいしさと感動を届けていく企業に育てていく」と誓った。

来賓を代表して古屋一樹セブン-イレブン・ジャパン社長は「50年は通過点である。今期、セブンイレブンは2万店を達成するが、まだまだ成長する。共に成長していこう」と激励の言葉を送り、鈴木敏文セブン&アイ・HD（会員社77社）を組合（会員社77社）を組織して技術共有して商品作りをしている。

「最初に約束したことを今日まで守っていただいていることがセブンイレブンの発展に大きく寄与している。今後もお互いの信頼、理念を失わないようにこれからの方々も約束してくださることをお願いしたい」と述べてあいさつした。